

「源叔父」成立考

——〈老翁〉の物語——

岩崎文人

国木田独歩の小説的出発は、いうまでもなく、「源叔父」(明30・8)(注1)であるが、それは、豊後の国佐伯を舞台とする、縊死によって自らの幸薄い生涯を閉じた、池田源太郎という名の〈老翁〉の物語であった。

この物語は、妻も子も喪い「世より忘れらるゝ者」となっていた源叔父と、「佐伯町付属の品物の様に取扱はれ」ていた孤児紀州との交流、そしてその破局を通して、どんなに深い愛情を注いだとしても、その愛が帰ってくるには限らない、という主題(注2)を紡ぎだして終わる。こうした、今日でもなお色褪せぬ深刻な主題を導きだした物語の成立に関しては、独歩自身の、「源叔父」(「武威野」に在り)／＼は源叔父其人も「紀州」と称する乞食の少年も実在の人物である。余が豊後の佐伯町に居た時分常に接近せるのみならず言葉も交はし其の身の上に就き深く同情を持ちしことある人物である。而して此一編中に記述したる此兩人それ／＼の身の上の事も事実である。けれども此兩人を結びつけたのは余の想で、これを結びつけて初めて此一編が作品

となつた」(「予が作品と事実」明40・9)、という発言が残されている。

東京でのいわば書生的生活を捨て、独歩が私塾鶴谷学館教師として大分県佐伯に赴いたのは、明治二六年九月二一日のことである。翌二七年八月一日、ふたたび上京するまでの約一年間、独歩は佐伯に滞在するわけであるが、「源叔父」は、地理的状况を含め、独歩が体験した佐伯の町がほぼ忠実に描出されている。

佐伯の中心部、城山、本町、横町、蟹田、その東を流れる番匠川とその河岸、さらに遠く、灘山、鶴見崎、佐伯の北部に位置する大入島、醍醐の入江と彦岳、作品中に描かれた主要な地名を列記すればこのようになる。〈地方〉を描いた小説といった文脈でいえば、「当世書生氣質」(明18・19)、「浮雲」(同20・22)という東京へ都会を舞台とする小説から始まった近代小説史のなかに、〈地方〉を主要舞台とする「源叔父」を置いてみれば、この作品の新しさもおのずと見えてくる。と同時に、のちに触れるが、東京という視座から〈地方〉が照射されているところにこの作品の特別な相貌がある、といつてよい。

モデルといった点では、〈源叔父〉も紀州も、独歩が「常に接近」

し、「言葉も交はし」、「其の身の上に就き深く同情」した人物、つまり、へ源叔父へも紀州も等しく独歩が交渉を持ち、深い関心を寄せた人物である、ということになる。

紀州について言えば、右の言は容易に確認できる。たとえば『欺かざるの記』中には、明治二十七年一月二十九日の記事をはじめとして数度にわたって、作品と同じ紀州という名で、具体的な像をとまなつて記述されている。また、その実像についても多くの証言が残されており、墓碑には、「行路病者俗称紀州之墓、自称野嶋松之助」と刻されている(注3)、という。

紀州の像が佐伯の地を離れたのちも独歩の脳裏に存在しつづけたことは、「豊後の国佐伯」(明28・5く6)において、「乞食」という見出しで一章を割き、「市人は一口に彼れを乞食といへど、余は屢々『彼れは何者』と自から問はずして止む能はざりしなり」と記し、佐伯滞在中および日清戦争従軍記者時代前後を回想した『欺かざるの記』明治三〇年一月二二日の記事(「源叔父」は、日記によれば、五月一日には脱稿しているので、その約四カ月前)でも、他と独立した形で、次のような記述が見られることから知られる。

あゝわれ彼の紀州乞食を思へば愈々人生の不可思議なるを感ず。

世の政治家をして其の功名心を弄せしめよ。世の文人をして其の空文をたのしましめよ。願はくはたゞ吾をして何時も何時も心浮世の波に迷はんとする時、彼の乞食を忍ばしめよ。あゝ憐れの靈。今如何にしたる。あゝ人の子よ。今如何にしたる。あゝ神よ彼人の上をめぐみ給へ。あゝ憐れの少年よ。

人生とは何ぞや。あゝ人生の目的は如何。あゝ彼の乞食を思へば此間の意味の一段に深きを覚ゆ。

これによれば、紀州は、「功名心」あるいは底の浅い文学の虚妄をつく存在であり、人生とはなにか、という重い問いを問い続けさせた存在として独歩の内部に濃密に記憶されていたことがわかる。

が、ことへ源叔父へに関して、独歩が書き記したものに具体的な像をとまなつて登場するわけではない。松本義一氏によれば、そのモデルは「独歩が下宿していた鎌田旅人宿の並びの、しかもごく近い所に住んでいた」高原嘉治郎である(注4)、といい、小野茂樹氏によれば、「当時の葛港の事情を知る人達」の話として、へ源叔父へのモデルとなった老船頭は、「独歩当時葛港の妙見社への上り口にあった松の木の下の方屋に住んでいた五十恰好の渡船業者で、眼のまるく小さい、小柄だが赤銅色のがっちりした体格の持主」である(注5)、という報告がなされている。

この他、独歩の下宿していた坂本家の近くにある避病院の「源爺」という老人説(注6)、さらには、独歩が親しく接した山口県麻里府村石崎吾一家の下男国吉がへ源叔父への性格付けに与っているという説(注7)等がある。

これらの報告を整理してみれば、まず、松本説に従わざるをえないが、独歩自身具体的に書き記したものが何一つ見当たらないという事実の重みは依然として残る。そもそも、これら諸説は、独歩の言「源叔父其の人も『紀州』と称する乞食の少年も実在の人物である。」「豊後の佐伯町に居た時分常に接近せるのみならず言葉も交はし其の

自身の上に就き深く同情を持ちしことある人物である。「から端を発している。この言説を疑うわけにはいかぬが、紀州が作品と同じ固有の名で具体的にしかも幾度も独歩の文章に現われ、一方、へ源叔父のモデルが固有の名はもちろん、一度も明確な像をもって記されていない、という事実はやはり考えてみる必要がある。従来、「常に接近し、「身の上の事も事実」という独歩の発言を、文字どおり、へ源叔父のモデルと「紀州」とに当分に振り分け、そのまま無条件に受け取ってきたわけであるが、モデル究明のこれまでの成果ならびに独歩の文章におけるモデル出現の有無といった点を考えれば、やはり、へ源叔父のモデルと紀州とを同レベルで考えるわけにはいかない。学習研究社版「国木田独歩全集」第六巻の塩田良平氏の「解題」に紹介されている独歩の「創作メモ」ともいべき断片には、佐伯時代に見聞した小説の素材三八項目が記載されているが、そこには「乞食紀州」は抽出されながら、へ源叔父のモデルとみなされる人物は見当たらない(注8)。こうした事実もいささか奇妙に思える。

北野昭彦氏は、「独歩が『源おぢ』以前に一度も彼のことを書かなかったのは、独歩が彼と出会ったころには、生徒数名をつれて上京する日が迫り、独歩の心がすでに東京に向いていたからであろう。」と指摘している(注9)。「欺かざるの記」の限定された時日での記述とといった点からいえばそうであろう。が、佐伯を去ってから「源叔父」完成までには三年近い年月があり、また、上京後も日記は書かれていた。へ源叔父のモデルとなる特定の人物に紀州と同じような深い関心が寄せられていたとすれば、当然なんらかの形で書き留められていてもよいはずである。事実、さきに触れたように、紀州に関しては、

その後の日記にも、また小品「豊後の国佐伯」その他にも書かれていた。作品のタイトルが「源叔父」であることに端的に示されるように、力点が置かれているのは、いうまでもなくへ源叔父へ池田源太郎である。この事実は逸することはできない。とすれば、やはり、はやくは、芦谷信和氏が指摘し(注10)、北野氏も「それまでの(上京以前の佐伯時代・筆者注)日記には別の老船頭等の『翁』に関する記述が多い。」と指摘した(注11)へ老翁の問題をクローズアップしないわけにはいかない。

二

「源叔父」は次のような印象的な一節で始まる。

都より一人の年若き教師下り来りて佐伯の子弟に語学教ふると殆ど一年、秋の中頃来りて夏の中頃去りぬ。夏の初、渠は城下に住むことを厭ひて、半里隔てし、桂と呼ぶ港の岸に移りつ、こゝより校舎に通ひたり。斯くて海辺にとゞまること一月、一月の間に言葉かはす程の人識りしは片手にて数ふるにも足らず。其重なる一人は宿の主人なり。或夕、雨降り風起ちて磯打つ波音もやゝ荒きに、独を好みて言葉少なき教師もさすがに物淋しく、二階なる一室を下りて主人夫婦が足投げだして涼み居し縁先に来りぬ。夫婦は燈つげんともせず薄暗き中に団扇もて蚊やりつゝ語れり、教師を見て、珍らしやと座を譲りつ。夕闇の風、軽ろく雨を吹けば一滴二滴、面を払を三人は心地よげに受けて四面山の話に入りぬ。

へ源叔父へ池田源太郎は、「年若き教師」と「宿の主人」「夫婦」との間で、夏の一夕、話題になった人物であり、「其後」「幾年の月日」がたった「或冬の夜」、都に帰った「教師」によってなつかしく回想されていくが、すでに多く指摘があるように、下宿人と宿の主人とが「四方山の話」をする、といった構図を彷彿とさせる独歩自身の体験を『欺かざるの記』中に見いだすことができる。

昨夜、二階を下り坂本老人と語る、佐伯に一個の老翁あり。奇怪の者を担ふて行くをしばく見受けぬ此老翁の事を問ひ、多少聞き得たり。此翁同情に堪へず何れの時か遇ふて親しく語る可し

(明26・11・27)

昨夜雨あり今日雨あり、人再生の思ひあり、青稻蘇生の色あり。昨夜涼風に乗じて宿処の主人等と語る、夜更けて雨をきつゝ一文を草じぬ

(明27・7・23)

最初の引用にある坂本老人は、独歩が弟収二とともに、明治二六年一〇月から翌二七年七月はじめまで下宿していた城山下の元佐伯藩家老坂本家の主人永年のことであり、次に引いた箇所にある「宿処の主人」は、二七年七月はじめから佐伯を離れるまでの一月間投宿した葛港の旅人宿の主人鎌田清作である。したがって、本文中にある、「城下に住むことを厭ひて、半里隔てし、桂と呼ぶ港の岸に移りつ」に照らせば、「源叔父」との相関は、当然後者となる。が、「源叔父」冒

頭にあるへ場への設定といった点にひとまず焦点を絞れば、おおよそ次のようなプロセスを経て、最終の文章へと熟していく姿を推認することができる。

その出発点に位置するのは、「可憐児」と題する草稿である。この小品は、独歩の死後刊行された『独歩小品』(明45・5)に収録された「憐れなる児」の原型と見てよく、『欺かざるの記』と同一の野紙が使用され(注12)、「明治廿六年十一月二十八日始ム」と注記されたものである。その冒頭部を引くと次のようなものである。

発端

一昨日は日曜日なりき。其夜吾二階を下りて坂本老人と物語りす。座に嬢と収二とあり、互に四面山の噂に笑声相続ぐ。最と楽しき晩なりし也。

佐伯の町に一個の小乞食あり。此乞食の身の上も亦た話の種となる。其の不潔なること語られ、而して又た其愚鈍なる事語られ互に哀れがりぬ。暫時にして主人の翁吾に向て曰はる様、さて先生、吾家にも亦た一個の愚者あり、已に御存知の如し。其愚かなる事譬へかたなき程なり。如何にすれば宜きか、殆んど当惑致し居る也。先生別に御工夫もなき者に候やと、言ふ迄でもなく吾此語を聞き、直ちに翁の心を知り、半ば項つき半ば笑ふて、実は甚だ挨拶に困まりぬ。然り御宅には馬鹿者ひとり御座りますとも言ひ難ければなり。

馬鹿者とは誰れぞ、愚者とは誰れの事ぞ。可憐児なり。(注13)

以下、坂本老人の妹の不幸な経歴、およびその子である「可憐児」の様子が詳述されていく。注記されている「明治廿六年十一月二十八日始ム」がほぼ確実なのは、先に引いた『欺かざるの記』十一月二七日の記事に続けてここで記されている「小乞食」紀州の記述があり、また、冒頭の一文「昨夜、二階を下り坂本老人と語る」がほぼそのまま用いられていることから知られる。が、日記の文章は、紀州の記事だけで、「可憐児」の中心話題である坂本家の「孤児」については何ら記されていない。

一月二七日の夜は、おそらく、寄宿先の坂本永年と話が弾み、「奇怪の者を担ふて行く」のを「しば〜」独歩に目撃された「一個の老翁」(注14)のことから始まり、紀州の話柄に移り、さらに、日記には記されていないが、永年の甥(「可憐児」のモデル)にまで話題が及んだに違いない。いずれも幸薄い哀れな人物であっただけに、独歩の関心をひかずにはいなかったであろう。日記に書き止められたのは、「一個の老翁」と紀州であったが、独歩は、永年の親族にあたる甥については、翌日日記とは別に改めて詳しく書き記すことになったのである。それが「可憐児」である。二六日、二七日と相当の分量で書きつがれていた日記が、二八日がわずか一行、二九日が六行(学習研究社版「国木田独歩全集」による行数。なお、本文の引用は、すべてこれによった。)といった具合に、極端に少量となるのも、「可憐児」執筆に時間をとられた結果と考えればうなづける。ただし、「可憐児」が「憐れなる児」(遺稿『独歩小品』)になり、最終稿「春の鳥」(明37・3)になるのは、かなりのちのことになる。

「春の鳥」の冒頭は、「今より六七年前、私は或地方に英語と数学

の教師を為て居たことが御座います。其町に城山といふのがあつて大木暗く繁つた山で、余り高くないが甚だ風景に富で居ましたゆゑ私は散歩がてら何時も此山に登りました。」という淡淡とした回想形式で始められ、「可憐児」冒頭の文体とは別物になっている。これは、同じように白痴の少年を描きながらも、「可憐児」冒頭部分の「吾へ二階を下りて〜坂本老人と物語りす」、「互にへ四面山の噂に〜笑声相続く」といった日記のスタイルを、「源叔父」で「へ二階なる一室を下りて〜主人夫婦が足投げだして涼み居し緑先に来りぬ」、「夕闇の風、軽ろく雨を吹けば一滴二滴、面を払を三人は心地よげに受けてへ四面山の話に〜入りぬ」といった具合に、その骨格をすでに採用していたためにそれを避けた結果であろう。むしろ、独歩自身の作風の変容といった事項もこれに加えねばならない。

さきに触れたように、独歩の佐伯における動向といった事実関係に整合するのは、葛港の旅人宿での一夕(七月三日)であるが、「源叔父」冒頭のへ場への設定は、以上のプロセスを見るかぎり、明治二六年一月二七日の日記が骨格をなしていると考えられる。したがって、へ場への設定に関しては、特定の下宿を穿鑿するよりも、むしろ佐伯での下宿生活一般が総合されて成立していると考えの方が穏やかであろう。とすれば、独歩とへ源叔父へのモデルとの出会いもまた、必ずしも、「源叔父」本文から帰納された葛港転宿後と限定しなくてもよくなる。が、ことは、事実と虚構といった点にまで及ぶので、ここでは一つの見方として提示するに止める。

「春の鳥」については、その成立も含め、新保邦寛氏「『春の鳥』の執筆時期をめぐって―中期の独歩文学とその背景から」にくわしい

(注15)。「春の鳥」の構造といった点にも当然触れねばならないが、ここでは、「可憐児」が有していたスタイルを生かして「源叔父」冒頭部分が成立し、へ老翁を中心とする「物語」が紡ぎだされていった、という話題をさらに進めよう。

三

『欺かざるの記』を読みすすめていけば、次のような興味深い記事に遭遇する。

昨日登りたる山は俗二十二段と称する由を本日、飯沼氏より聞く。吾窓よりの眺めの余りに美しさに堪へ兼ね、昨日遂に此山に登りぬ。八時過ぎ弟と共に家を出づ。無類の好天気なり。船土町の川岸より川船に乗りて木立と謂ふ村の川岸に着す。此間水上一里を少しく越ゆ。(略)船頭は老ひたれど逞まじげなる男なり。船ゆるやかに河流を渡る心地の面白さ。吾にはじめての事也。兩岸の紅葉、岸頭の茅屋、之れをかこむまがき、其傍に立つ田舎娘、青びかる淵、きびわるげのうづ、皆吾が目につらしからぬはなし。此の河船もたしかに吾物語の料なりと思ふ。之れによりて往復する田舎の民、其婦、其嫗、其小女、いち／＼とさば悉く相応の美しき物語をもたぬはなかるまじと思はる。同情に堪へぬは此等の生涯なり。

(略)

遂に一条の道に出づ。これに力を得て山巔を目掛けて登る。松の老株の下に石地頭あり、其傍に一老樵、いこふ。彼れ親切に道を

教へぬ。マイケルを想ひ出して又た此老翁を思ふ也。

山巔に達したる時は四囲の光景余りに美に、余りに大に、余りに全きが為め、感激して涙下らんとしぬ。只だ名状し難き鼓動の心底に激しるを見る也。(明26・11・6)

十二段より帰路、又た河船に乗る、船頭只だ吾等兩人の為に船を走る、此船頭は先きの船頭とは別人なり。されど等しく老人なり。夕陽已に斜に秋の晴天を照らすに当り、船ゆるやかに河流をわたる、船頭は嘗て長崎に在りて黒船も造りたる事ありと自から語る、其述懐は人をして人生の経過を思はしむ、吾此の老人を忘るゝ能はず。何となれば彼を一個のソールとして天地間に於ける人間の生涯となせば也。此老翁の一生と雖も、必ず深き物語あること必せり。(明26・11・7)

二日にわたって記述されてはいるが、この記事は、明治二六年一月五日になされた元越山登山のものである。「十二段」と普通呼ばれているのは、「南海郡郡の木立村と米水津村との境界に立つ山で、その山腹には大分県下有名な桜の名所浦代峠もあり、独歩の「下宿の二階から左手遥かに常に眺められた」(注16)元越山のこと、独歩は佐伯滞在中に二度ばかり(二度目は、翌二七年四月二三日)登山している。独歩の死後、遺稿として『俳味』(明44・5)に発表された紀行文「元越山に登ル記」は、こうした登山行をもとにしている。

ここには、たしかに、山頂にたどりついた感動が、「四囲の光景余りに美に、余りに大に、余りに全きが為め、感激して涙下らんとしぬ。

只だ名伏し難き鼓動の心底に激^ツしるを見る也」、といったいささか高揚した行文で記されてはいるが、それとは別に、とくに注意を引くのは、登山の往復路それぞれで出会った老船頭に深い関心を抱いたさまが記述されていることである。つまり、船土町から対岸の木立村までの渡船の老船頭、帰路河船をあやつった老船頭二人である。さらには、へ老翁^ノと云った点では、「マイケルを思い出」させたという「一老樵」をこれに加えるべきであろう。

佐伯滞在中のへ老翁^ノへの独歩の関心が一時のものでないことは、『欺かざるの記』中にしばしばへ老翁^ノの記述があることから知られる。既出のものは別として、二三引く。

昨日路傍に見たる彼の樂しげなる一族に宿る詩神の調和の聲、如何、彼の山谷に出遇ふたる老ひたる樵夫と其の前を導きたる小児の上に住む詩神の深き聲は如何、遠山の絶頂より立ち登りし晚煙に住む詩神如何、千百の山谷の千百の村落に住む詩神如何、

(明26・10・9)

大嶋尚三は年老ひて子なく、今は其職を失なひ、老ひたる妻と共に東秀氏の部屋に住む。此部屋は東老母が二十五年の秋の終はりまで住みたる部屋なり。大嶋尚三計らずも茲を借り住むこととなりし也。聞く所によれば彼が職を失ひたる原因は或悪人共が欺^ツ偽取財の兇行に多少加担したるが為めなり、之れを以て其登記所小使の職を止められし也。此老人は吾が一家吉見氏の宅に住みつる時しばしば来り飲みたり。子なし、只だ老夫婦のみ、彼が多少の

罪惡は衆人の認むる処なるにもかゝらず無罪の宣告を受けて幸に牢獄の苦はまぬかれぬ。吾も人も其罪は惡めども、其の老ひて職なく金なく子なきを憐れむなり

一個此老人、及び其の妻、彼等が運命、罪惡、不幸は確かに詩料となすに足る者ある也
(明27・1・1)

登校前教会堂に到る、室内暗黒、即ち出で、散歩を試む、授業時間少し早や過ぐるを以てなり。

歸りて校に入り、暫時校舎の一遇に宿る大工老夫婦の室に語る。
老夫婦は吾が詩料となる可し。
(明27・2・1)

二十七日の薄暮坂本氏にて馳走せられ、夜日置、関谷高橋の三氏吾かために送別の宴を聞かる夜や、更けて車に乗り帰宅。市街より桂港に至るの間里程殆んど一里。四方まことに寂然。車上瞑想して人生の流転を思ひ、老翁の事など思いつゞく。

吾が職分は詩なり。吾は詩人の外、能はず

(明27・7・29)

第二番目の引用は、冬期休暇のため山口県柳井に帰郷した際の見聞である。長い文章にもかかわらずあえて引いたのは他でもない。独歩の関心の有りようがそこにはっきりと見て取れるからである。つまり、一月七日に記述されていた老船頭の記述とを併置してみれば、独歩は、へ老翁^ノのそれまでたどった生涯に一つの「物語」を見ているの

である。そこでは、かつて長崎で黒船造船にかかわったという流転の人生が語られ、大嶋尚三の老残ともいってよい不如意の人生が語られている。その他一々の説明は省くが、「詩料」「詩神」「運命」、さらには「美しき物語」「深き物語」という語に象徴されるように、いずれも「物語」を内に蔵したへ老翁が掬い取られているのである。とくに最後の引用は、一年間におよぶ佐伯生活に終止符を打ち、まもなく上京しようとしていたときのものであるが、回顧的内省的な心情から、「人生」を思い、へ老翁に思いが至っていること、さらには、詩人としての自己を選び取ろうと決意した文章とともに記述されていることはとくに注目してよい。自己の文学を「人生の研究の結果の報告」（「我は如何にして小説家となりしか」明40・1）と規定した独歩にとつてそれはまさしく文学の問題、文学そのものであった。のちに「源叔父」の「物語」に熟していくへ老翁の「物語」は、すでに準備されつつあったのである。モデルの穿鑿は別として、明治二六年一月二七日の日記に記された「彼の老翁、此乞食、共に悲しき物語ならずや」という一文は、そのことをよく示している。

四

ところで、独歩はなぜこれほどまでにへ老翁に深い関心を寄せたのであろうか。

その手がかりは、実は、元越山登山行を記した日記のなかにさり気なく示されていた。繰り返しになるがその一節を引こう。

遂に一条の道に出づ。これに力を得て山巔を目がけて登る。松の

老株の下に石地頭あり、其傍に一老樵、いこふ。彼れ親切に道を教へぬ。マイケルを想ひ出して又た此老翁を思ふ也。

佐伯を離れて六年余ののち、独歩は、「小春」（明33・2）を発表し、「自分が最も熱心にヨーズワースを読んだのは豊後の佐伯に居た時分である」、「『マイケル』を読んでリウクの命運の為に三行の涙を注いだ」と書き、また後年、自らの作家生活をふりかえって記した「不可思議なる大自然（ワーズワースの自然主義と余）」（明41・2）の中では、佐伯が「山に富み溪流に富み、溪谷の奥に小村落あり、村落老て物語多く、実にワーズワース信者をして『マイケル』の二三は此処彼処に転がつて居そうに思はしめた」と語っている。ワーズワースと独歩というテーマは、すでに幾度となく繰り返し考察された課題であるが、独歩におけるへ老翁といった問題を考えるうえでやはり触れないわけにはいかない。

「マイケル」の物語のおおよそは、次のようなものである。

「グラスミアアの谷の森の側に」、八十歳をこえた、「健やか」で「質素」なマイケルという老牧羊者が静かに暮らしていた。彼には、「二十歳は優に若い妻イザベル」と「将来の希望」であり、「日々の喜び」であるひとり息子ルークがいた。「谷間に住む人々」は、「遙か遠くからも見える」マイケル家のともしびを「宵の明星」と呼んで親しんでいた。

ルークが一八歳になるまで、平穏で平和な歳月が流れた。が、「甥の借金の保証人」になっていたマイケルがその損失を肩代りしなければならぬという災難に見舞われてから、一家の不幸が始まる。「彼

の生涯から希望が奪い去られた」のは、このころからである。

一家の窮乏を救うために、ルークは都会に出。はじめこそ、「彼の善行のよい報告」が親類からもたらされ、「愛情のこもった手紙」がルークから届いていたが、「多くの月日」が「過ぎ去り」、ルークは、都会で次第に墮落していく。

マイケルは、「羊小屋の建築に力を尽くし」ていたが、それも未完のまま世を去る。イザベルも、マイケルの死後数年のち死んでいく。土地は人手にわたり、人々が「宵の明星」と名付けた「小屋」はなくなり、「未完成のままの羊小屋の廢墟」のみが残る。(注17)

独歩がワーズワースの詩集を手にしたのは、明治二五年九月と推定されている(注18)。が、こと「マイケル」に関しては、独歩はそれより早く読んでいたと思われる。

すではやく、塩田良平氏は、「国木田独歩」のなかで、「マイケル」前半部が「山の翁」と題して山田美妙の手によって訳されている事実を指摘している(注19)。具体的に示せば、それは、「国民之友」第百十八号、百二十一号(明24・5・6)に発表されたものである。明治二四年といえ、独歩は東京専門学校を退学し、山口県麻郷村に帰国しているわけであるが、美妙の「山の翁」の掲載されている「国民之友」はまちがいなく読んでいたと思われる(注20)。というのは、独歩が最初の小文「群書ニ渉レ」(明21・3)を発表したのが民友社系の機関誌「青年恩海」であるという事情もあるが、『明治廿四年日記』を見ると、帰国五日後に国民新聞社に雑誌代一円を送金したという記事があり、五月一三日には「夜国民之友百十七号経済雑誌五百七十一号を読み」と記され、一七日には「国民之友日本評論亦た来る」とい

う一文が確認できるからである。したがって、独歩の内部に美妙訳による「マイケル」像が最初に記憶されたであろうことは十分考えられる。ちなみに、明治二五年一月に発表された「田家文学とは何ぞ」には、「右は山田美妙齋氏訳、国民之友第百十八号、韻文、山の翁」と注記された引用がなされている。

が、それは兎も角として、確実なのは、独歩が佐伯の「マイケル」を探し求めて佐伯の町を散策したという事実である。その証左が日記に記された数多くの「老翁」達であったのである。そこには時として具体的な「老翁」の人生が記され、そしてそれは「詩神」「詩料」、あるいは「美しき物語」「深き物語」ということばとともに記述されていた。それら「老翁」の一人ひとりの人生に独歩は、「マイケル」の悲しいそれだけで豊かな物語と同等の「種々の悲しき、貴き、深き物語」(明26・11・27)を見いだしていったのである。そういえば、佐伯時代ではあるが、佐伯を離れた独歩の郷里で見聞された「老翁」大嶋尚三の例をさきに引いた。大嶋の不如意の人生の始まり・「欺偽取財の兇行に多少加担」は、マイケルの悲劇の始まり・「借金^{カウチ}の保証人」と、ともに経済的営為による破綻という意味では実によく似ていた。大嶋老人の敗残の生涯を日記に記したとき、独歩は、おそらく「マイケル」の物語を想起していたに違いない。

しかし、問題は、佐伯において独歩がなぜこれら「老翁」を自分自身の問題としてすくいとっていったのか、という最後の重要な問いである。言い換えるならば、「マイケル」の物語に深く共鳴する独歩の精神の有りようである。というのも、いうまでもないことであるが、「マイケル」を読んだということと、それを自らの精神的課題として

把握したということとは、おのずと別のことだからである。

佐伯時代がたんにワーズワース受容の期間であっただけでなく、独歩の精神形成のうえで重要な位置を占めていたかは、たとえば、鶴谷学館着任の労をとった徳富蘇峰の「佐伯に於ける一ケ年の修養は後年独歩の名を文壇に高からしむる基礎を作つた大切な時代」である（注21）、という発言をことさら引くまでもなく自明のことである。「欺かざるの記」でも佐伯時代はとくに詳しく書かれており、独歩の精神の姿ないしその揺れが鮮やかに看取される。

生活！ 人間が此世界の上に於て、取りし生活は実に様々なり。数ふるに暇なからんとす。嗚呼 牧夫の生活、海士の生活、農夫の生活、官吏の生活、僧侶の生活、学者の生活、詩人の生活、而して猶ほ其中に種々の変化ある可し。想像し来れば実に様々の人の生活なる哉。それ此の如く様々なり。而も等しく之れ地の上、天の下、同じ月に照らされ、同じ日に照らされ、同じ花を見、同じ空気を呼吸したるに過ぎず。大自然に対する人として何のかわりあらんや、それ何のかわりあらん。（明26・11・23）

青年期の独歩の内部に素朴な英雄崇拜、立身出世への強い渴望があったことは、「我は如何にして小説家となりしか」（明40・1）を引くまでもなく、よく知られた事実である。そこには、「功名心」が猛烈であつた少年時が回想され、ナポレオン、豊太閤を指標とする人生観をもつていたことが素直に語られていた。山口からの東京行は、間違いなく、立身出世を夢見てのものであつた。が、独歩は、父専八の退職

を機に、糊口のため、東京を離れ九州佐伯へと下る。この期の独歩の心中は、佐伯に出発する半年前、なお「ア、吾に虚栄、虚名の念、内に燃ゆ、何んぞ靈の眼を有つを得んや」「父母、故郷に吾の立身出世、乃ち社会的富貴光栄を祈りて待つ」（明26・3・16）と記さざるをえなかつた事実からも容易に推測できよう。が、独歩は、佐伯で東京を中心にした文化あるいは人生観と言い換えても同じであるが、それとは異質の世界を見るのである。引用にある「様々の人の生活」の発見は、そのことをよく物語っている。それまでさほど意識して見ることもなかつた「様々の人」の人生は、やがて、「余はクリスト、ウオーズワース、カライル、テニソンの心を信じて其の信仰を羨むと同時に只だ夫れ無罪にして山間に朽つる農夫の心をも尊く感ず。其の心を羨む」（明27・4・4）という思いを生み出していく。それは、従来の生き方の指標となつていた立身出世主義的的人生観とは異質の人生の発見であつた。ことばを換えて云えば、英雄、偉人の人生と「山間に朽つる農夫」いわば普通の人の人生とを等価に見る考え方の獲得といつてもよいし、「村」へ地方への発見といつてもよい。

嗚呼愛す可き同胞よ。山に生れて山に死し、野に生れて野に死し、村に生れて村に死し、生れて河に手を洗ひ、死して岸に葬らるゝ吾が愛す可き同胞よノバニチーに苦みたる心を転じて静かに御身が一生を思ふ時は、始めて人生の真面目なる樂を悟る也。深き意味を感じる也。（明26・11・12）

「奇怪の者を担ふて行くをしばく見受け」たという「老翁」も、

十二段登山行で遭遇した二人の「老船頭」も、「老樵」もさらには大嶋尚三も等しく、「村に生まれて村に死(す)」典型としての人物として独歩にとらえられたのであり、「源叔父」の物語が東京というへ都會へからへ地方への一「老翁」を懐旧するという構図をもつのも、理由のないことではない。独歩が一年間九州の佐伯で生活したという外側の事実よりも、より重要なのは、そこで獲得された精神であり、その精神を色濃く反映して成ったのが「源叔父」であったということである。ついでに記せば、紀州もまた最初に触れたように、「人生の不思議」に思いをいたらせ、「功名心」の虚妄をつく存在として独歩にとらえられていた。

のちに独歩は、「自から何を書かんと」「欺かざるの記」から「試に題材を撰」んだ時のことを回想した文章（「不可思議なる大自然(ワーツワースの自然主義と余)」)の中で、自らの手の内を明かすように、次のような人物を書き記している。

◎芳島と女島との間の渡守り。

◎女島にて見たる水門を下せし若者。

◎船頭町より木立村の間を渡す舟子

◎十二段(山名)の山腹にて逢ひし老樵夫。

◎こじき紀州(人名)

第三、四番目の「舟子」「老樵夫」はさきに引用した元越山登山の際に出会った「老翁」たちであるが、第一番目の「渡守り」および二番目の「若者」は、元越山登山の二日前、明治二六年一月三日、独

歩の弟収二と共に散歩した際に目撃された人物である。日記には、「海近き河流の口にいたり石にこしかけて遊ぶ。潮をちて州はあはれ、鳥の群しきりに飛びめぐる。水門を下す童子を見き。小舟をなだ山に渡さんとて潮をまつ小供を見き。水門の傍に背ひくませば、堤の上にたちて浜風に紅葉をかぐやかす様の美しさ。渡守りを見き。此渡守りの小屋に入りて物語らば面白からまし。彼も亦、わが「物語」に入る可き一人ならずや。」(明26・11・4)とある。ここでの「渡守り」は老翁とも若年者とも記されてはいないが、「童子」「小供」と対比的に記述してあること、さらには、いままでしばしば触れた、語るべき「物語」を蔵していることなどから、へ老翁とみてさしつかえないであろう。

ことほどさように、独歩の内部には、佐伯であった個々のへ老翁一人ひとり、特別の意味をもって記憶されていたのである。へ源叔父へのモデルもその一人であって、それ以上ではけっしてない。重要なのは、へ老翁という語に収斂される「物語」そのものに独歩の精神が引き寄せられていたという事実である。

こうしてたどってくると、はやくは、芦谷信和氏が「渡し守源をちへは」「独歩が佐伯の地で見た幾人かの渡し守の姿態を重ね合わせて創り上げられている」と記した見解(注22)につきるといってよい。のちの北野昭彦氏の「源叔父像は高原嘉治郎とマイケルの二重写しだけでなく、そうした(明治26年11月7日の記事にある老船頭他・筆者注)幾人かの老船頭の心象をも反映して形象されたトータルな像」(注23)という指摘、あるいは、滝藤瀧義氏の「『欺かざるの記』に河船の船頭に関する記事はあり、また二十八年四月八日の日付を持つ独歩の『創

作メモ」には「三人の船頭が最初の所に記されていて」「独歩がこれら佐伯の船頭たちに『忘れ得ぬ人』を感じていたことは事実である。」「これに葛港の下宿鎌田の夫妻から聞いたと思われる高原嘉治郎かと松本義一氏の推定する船頭の身の上のこともが合わされて、源叔父の像ができたのかもしれない。」(注24)という見解も、基本的にこの延長線上にある。いずれにしても、これらの考察はモデル問題の一応の決着をつけるものといつてよい。

〈源叔父〉のモデルに関する考察は、今後これ以上のものはおそらく出現しないであろう。ただここで強調しておきたいのは、モデルの特定といった問題よりも、佐伯のヘマイケル、村で生まれ村に死(した)〈へ老翁〉の「物語」が「源叔父」であったということ、しかも、作品の表層にはそれほど顕著にあらわれてはいないが、その〈老翁〉こそ独歩の立身出世を至上のものとする人生観の組み替えを促す「物語」の出発点に位置するものであったということである。

〈老翁〉への深い関心は、独歩の文学的出発の有りよう自身がおのずと明らかにしている。佐伯滞在中の収獲(注25)ともいうべき長詩「かぐや姫」は、「竹とりの翁」の物語であり、それは、「村里の田園」に「さびしく暮らす」媼翁の日常と「かぐや姫」が家族の一員になるところまでがつづられた文語詩であった。また、独歩がのちに『独歩吟』に収載されることになる「故郷の翁に与ふ」で、「翁よ今もすこやかに／丘の麓にくらすらん」と故郷のへ老翁をうたったのは、「源叔父」発表に先立つ明治三〇年三月であり、独歩の最初の散文の試みは、「旅の翁」を描いた「たき火」(明29・11)であった。しかも、「たき火」は、「源叔父」発表と同じ月に、ジャンルをこと

にした詩に書き改められ、ふたたび公にされるが、これらは、あなたが偶然ではあるまい。ついでに記せば、へ老翁の物語「源叔父」で出発した独歩の最後の作品は、定年退職後悠悠自適の日々を送る石井翁と生活費の捻出もままならぬ河田翁ふたりを描いた「二老人」(明41・1)であった。

まさしく独歩は、へ老翁の物語で出発し、へ老翁を描出する作品で、文学的生涯を閉じたことになる。

注1 第一文集『武蔵野』に収録される際、「源おぢ」と改題されたが、ここでは処女作という意味で「源叔父」という表記に統一した。

注2 主題に関しては、かつて、拙書『一つの水脈―独歩・白鳥・鱒二―』(平2・9)において考察を加えたことがある。また、芦谷信和氏に、研究史的展望を含めた詳細な論考「源叔父」(『独歩文学の基調』へ平元・6)所収がある。

注3 松本義一『国木田独歩「源叔父」アルバム』(昭35・3)

注4 注3に同じ。推定の主要な根拠になっているのは、へ源叔父の住居周辺と高原嘉治郎のそれとの類似、および嘉治郎の一角が溺死したという事実が小説中にへ源叔父の独子孝助の溺死として組み込まれているということである。

注5 『若き日の国木田独歩』(昭34・12)

注6 鎌倉文庫版「国木田独歩全集」第五巻の解説に始まり、学習研究社版全集第六巻の注もこの説をとっている。

注7 上杉玉舟『独歩回想』(昭37・3)ほかで報告されている山根ゆ

り子(熊毛郡麻里府、石崎家六女)談。

注8 もっとも、断片は、そのナンバーから残されたもの以外があった可能性が指摘されている。この辺りは定かではない。しかし、同メモから抜粋したと思われる「不可思議なる大自然」での題材連記にも「こじき紀州」はあるが、(源叔父)のモデルと目される人物はあげられていない。

注9 『国木田独歩「忘れえぬ人々」論他』(昭56・1)

注10 「独歩「源をち」の素材―作者の経験事実とその構成―」

(『立命館文学第一五八号』昭33・7)

注11 注9に同じ。

注12 本多浩「補遺解題」(学習研究社版「定本国木田独歩全集別巻」昭42・9)による。

注13 草稿にある抹消部分の注記は、煩瑣になるため省き、変体字も改めた。

注14 注6にいう老人。

注15 『稿本近代文学』(平元・11)

注16 注5に同じ。

注17 田部重治『ワーズワース詩集』(岩波文庫 昭13・9)の訳による。

注18 塩田良平「国木田独歩に及ぼしたワーズワースの影響」(『明治大正文学研究第十七号』昭30・9)。なお、独歩が最初に読んだワーズワース詩集のテキストに関しては、山田博光氏「ワーズワース詩集と国木田独歩」(『比較文学』昭56・12)にくわしい。

注19 塩田良平「国木田独歩」(『岩波講座日本文学』昭6・12)

注20 ついでに記せば、「国民之友」第百五号付録(明24・1)に載った無名氏「九十九の嬸」は、「乞食と落ちぶれた」「嬸」が夕刻

「千鳥の声さびしき浦をさまよひ、「子供」の姿をさがしつつ往時をしのぶ、といった内容の叙事詩であるが、「たき火」との類縁性が指摘できる。「たき火」創出に、あるいはひろく独歩の(老翁老嫗)への関心に関わりがあるのかもしれない。

注21 「予の知れる国木田独歩」(『新潮国木田独歩号』明41・7)

注22 注10に同じ。

注23 注9に同じ。

注24 『国木田独歩論』(明61・5)

注25 「かぐや姫」は、明治31年6月、「反省雑誌」に発表されたものであるが、『欺かざるの記』には、「竹語」の改作、第一章成る。(明27・4・30)、「今朝「竹取物語」の新体詩其一を作る。」(同・5・9)、「昨日「竹取物語」の第三の一節を作る。」(同・5・18)、「今夜「だけとり」の一節をものす」(同・6・4)といった記事が見られ、この期に形を成したものと考えられる。「竹取物語」に関しては、「竹取物語を読み吾大に吾国文の妙なるに感じ、此物語の神韻縹渺として詩想の高きに感ず、かぐや姫の将に月の宮の帰らんとて、嘆き悲み、養ひ翁の別れ惜みてもたへ苦む様情こまかにし言外の妙味実吾をして幾度か巻を掩ふて泣かしめぬ。」(明26・11・26)という記述があり、独歩は、「父子(離別)の情」に読みの中心を置いているが、老翁老嫗の日常をうたう部分での中絶は、現実の(老翁)の物語を志向する書き手としての独歩の思念がうかがえる気もする。